

連濁試論（その2）

平田淳子

1. はじめに

前稿では、「田」で終わる3モーラ名字を対象として、前部要素が3モーラ目にどのような影響を与えるかを観察した結果、連濁現象を生じさせると思われる大まかな条件を見いだした。2モーラ目の子音（以下C2と記す）が鼻子音、撥音、長音の場合は「田」を/d/と発音することが多く、またC2が促音の場合と、鼻子音、半母音、流音を除く有声子音の場合は大概「田」を/ta/と発音した。

前稿は「田」で終わる3モーラ名字の収集に不足があったため、本稿はより網羅性が期待できるデータを基に分析を行う。/ta/と/d/を生起させる原因を、名字の前部要素、特にC2に着目して探ることが本稿のねらいである。

2. 調査の目的と方法

2.1. 収集方法

2.1.1. サンプル対象

「田」で終わる3モーラ名字（仮名3文字）を収集対象とし、名字を構成する漢字が異なる場合でも、同じ読み方であれば同一データとする。

2.1.2. 抽出の基本データ

津山武志氏が648万件の名字データから抽出した約5万件の名字ランキングデータに基づく。上記データの中からサンプル対象に合致するものを635件抽出した。

2.2. 分析方法

以前得られた結果は、3モーラ名字のアクセントや意味的構造の分析に頼らない見地からの観察であったにも拘らず、一般的に知られている連濁現象と合致したものであった。

今回も引き続き、単純且つ限定した方法、つまり音韻構成のみに注目して検証を進める。

まず抽出したデータを50音順に並べ替え、①/ta/項目にしか現れない名字、②/da/項目にしか現れない名字に分類、前部要素の構成（子音1、母音1、C2、母音2の組み合わせ、以下C1, V1, C2, V2と記す）が同じであるにも拘らず、③/ta/とも/da/とも読む名字を併用項目として分類した。C1V1が同じであれば、/ta/と/da/を区別すると考えられる要素C2V2に限定されることになる。今回は主にC2に注目、そこに出現した音を分類し以下の分析パラメータとして決定した。

パラメータは「0C2」（ゼロC2）、「無声子音」(/k//s//ʃ//t//ts/)、「有声子音」(/b//dʒ//z//g//ʒ/)、「鼻音」(/m//n/)、「接近音」(/j//w/)、「流音」(/r/)、「撥音」(/N/)とした。前回の観察では撥音の/N/は鼻音の中に含まれており、/N/以外の/m//n/の「田」にもたらす影響を詳細に分析できなかったために、今回は別パラメータとして設けた。

3. 分析

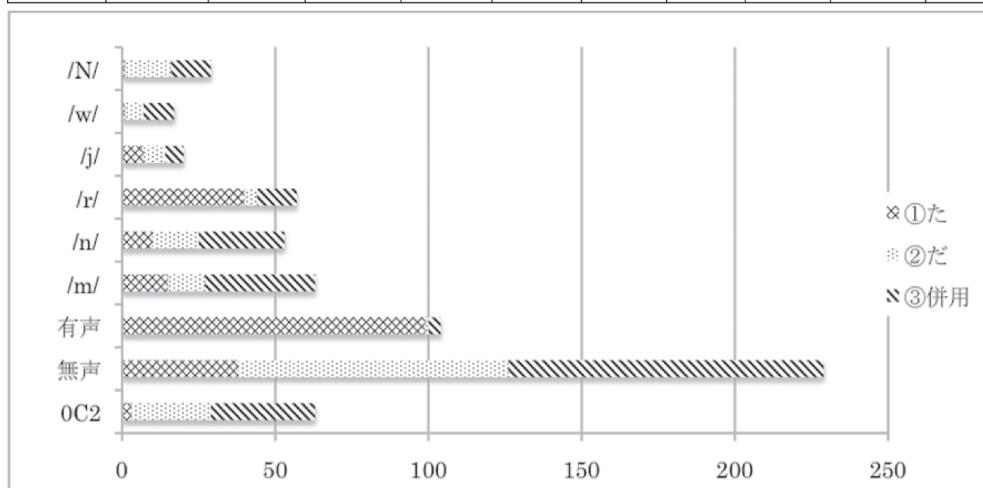
3.1. 収集データ全個数からの観察

パラメータ毎にC2の個数を数えると表1のような結果になった。目立つ数値からパーセンテージで列挙すると、①/ta/と発音する名字に関しては

- 1) 有声音 95% (99/104、パラメータ毎の個数/全個数、以下同様)
- 2) 流音 70% (40/57)
- 3) 無声音 16.6% (38/229) が多く観察できる。②/da/に関しては
 - 1) 無声音 38% (88/229)が多い
 - 2) 0C2 41% (26/63) 例：aida の場合は、

表1 総合分析（括弧内の数値は各項目毎の%）

	0C2	無声音	有声音	/m/	/n/	/r/	/j/	/w/	/N/	合計
①ta	3(5)	38(17)	99(95)	15(24)	10(19)	40(70)	7(35)	1(6)	1(3)	214
②da	26(41)	88(38)	1(1)	12(19)	15(28)	4(7)	7(35)	6(35)	15(52)	174
③併用	34(54)	103(45)	4(4)	36(57)	28(53)	13(23)	6(30)	10(59)	13(45)	247
合計	63	229	104	63	53	57	20	17	29	635



/ta/と読む場合に比して/da/と読む方が多い
③の併用項目に於いては、「田」を/ta/とも/da/とも読む可能性がある場合であるが、

- 1) 無声音数がパラメータの中で最多 45% (103/229)
- 2) 0C2 の 54%(34/63)、/m/の 57%(36/63)や/n/の 53%(28/53)の鼻子音の場合も、/ta/や/da/それぞれの項目に現れる数値の合計より多い
また各項目に渡って観察すると、
 - 1) C2 が有声音であれば続く「田」は、ほぼ/ta/と発音するが、それに対して
 - 2) C2 が無声音であれば、/da/と発音することの方がやや多く、また併用数も多く、/ta/とも/da/とも発音される
 - 3) 鼻子音/m//n/の場合、数値はほぼ同数
この場合も併用数が多く、/ta/とも/da/とも発音されることが多い
 - 4) 流音であれば/ta/と発音される場合が多い
 - 5) 接近音/j/は全項目ほぼ同数
/w/に関しては/da/と発音されることが多い

- 6) 撥音/N/に於いては、/ta/と/da/双方で発音されるか、/ta/よりも/da/と発音される方が多い
- 7) 0C2 も撥音の場合と同様、双方を比較すると/da/と発音されることが多い

3.2. 頭音の段別観察

各段の観察をすることは、V1 が共通項として存在するため、C1 の C2 に対する影響を検討できるのではないか。

A段（アカサタナハマヤワ、注：ラで始まる名字はデータ無し）の個数は、表1（全体数）の大凡 1/3 の縮図である。総合分析と異なる点は、

- 1) 鼻子音/n/の②/da/と発音する場合の割合が 40%(8/20 データ数)（総合：28%）、③併用に於いても 40% (8/20)（総合：57%）ある
- 2) 接近音/j/の②/da/の割合が 57%（総合：35%）である
- イ段（イキシチニヒミリ）では、どのパラメータにも/ta/と発音されることがある。
 - 1) 有声音が①/ta/に於いて 100%(25/25)（総合：95%）であり、また有声音があれば必ず/ta/

と発音されることが分かる

2) 無声音は①/ta/に於いても②/da/に於いても同数 22%(10/45) (総合 : 16.6%, 38%) あり、③併用は 55%(25/45) (総合 : 45%)

3) 鼻子音/m/が①に於いて 43%(6/14) (総合 : 24%)

4) 接近音/j/ は①/ta/で 14%(1/7) (総合 : 35%)、②/da/で 29%(2/7) (総合 : 35%)、③で 57%(4/7) (総合 : 30%)

5) 流音は①/ta/に於いて 88%(7/8) (総合 : 70%)

ウ段では、C2 の無声音が/ta/と/da/に於いては、/da/(21/45)の個数は/ta/(5/45)の約 4 倍である。

1) 無声音は③併用項目中 42% (19/45) (総合 : 38%)

2) 鼻子音 /m/ は 83%(10/12) (総合 : 57%)、/n/ は 90%(9/10) (総合 : 53%)

エ段は極端にデータが希少(34)である。加えて/ta/と発音される条件は、C2 が無声音、有声音、流音の場合に限定される。

オ段に於いてもウ段と同様、/ta/と/da/における C2 の無声音については、/da/が/ta/の約 4 倍である。

1) 無声音が②/da/では 48%(23/48) (総合 : 38%) と③併用で 35%(17/48) (総合 : 45%) と総合の場合と数値が逆転している

2) OC2 は②/da/では 19%(4/21) (総合 : 41%)、③併用項目で 76%(16/21) (総合 : 54%)

いずれの段に於いても現れる特徴は、C2 が無声音の場合は 3 モーラ目が/da/、有声音の場合は/ta/と発音されることが多い、ことである。促音/Q/は無声音のパラメータ内に含めてしまったため表には現れてはいないが必ず/ta/と発音される。また、鼻子音の場合は、前回の分析で/da/を導きだす可能性が高いとの結果が出ていたが、各段とも併用項目が多く、3 モーラ目が/ta/になるか/da/になるかは上記表の観察からは断定できない。C2 が撥音の場合は/da/になる可能性が高い。併用項目が多い OC2 の場合は、/da/が/ta/より多い。

各段の観察によれば、ア段、オ段は比較的各パラメータの出現分布が似ているが、イ段には/da/が少なく、ウ段には併用項目の分布が比較的、鼻音、流音に偏っている。エ段についてはデータ数が少ないが、接近音数がないことを除けばア段オ段に近い。

3.3. 50 音の行毎の観察

頭音について行毎の観察を行うことで、V1 が/aieuo/と変化する過程で、C2 の連濁現象への関与に影響を与えるかを検討する。

ア行一タ行、及びヤ行は、/ta/と発音される場合は有声音が、/da/と発音される場合は無声音が多く、/ta//da/どちらにも発音されうる併用項目にあってはかなり無声音も多い、というところに共通点を見いだすことができ、総合分析と同様である。それに対して、ナ行一マ行に於いて/ta/と発音される場合の無声音と有声音の数値に隔たりがなく、総合分析とは異なる。/da/項目と併用項目での無声音の多さは上記のア行一タ行、ヤ行と共に通じて、総合分析と同様である。

個々について見ると、ア行とカ行、更にハ行ではいずれも/ta/と発音される場合の C2 が流音の場合が多く、総合分析と同様である。

4. 考察

この研究の契機となった/hirata/と/harada/という一見似通った名字の「田」の読みの違いは、C2 のみによる作用ではなく、C2V2 が同じでありながら、「田」の読みが異なる要因の候補として、V1 の違いが挙げられるが、果たしてどうか。

また/kamata/と/kamada/の場合は、2 モーラ目まで同一であるのに、3 モーラ目で変異が生じている。総合分析では音韻環境のみで考慮される要因は、C2 が/m/である点だが、果たしてどうか。

包括的観点から検討してみたい(表2・3 参照)。頭音の段毎の分析では、変化する C1 条件により、「3 モーラ目が連濁するかしないかに影響を及ぼしている」と思われる C2 に対して、どのような作用を及ぼしているかを検討してみる。

表2 総合分析と頭音の段別分析との出現頻度比較

①/ta/ ②/da/ ③併用 各項目の出現頻度パターンが

- ◎ よく似ている
- 似ている
- △ 似ているところもある
- × 全く似ていない

総合	0C2	無声音	有声音	/m/	/n/	/r/	/j/	/w/	/N/
ア段	△	◎	◎	△	○	△	△	×	○
イ段	○	×	◎	○	○	△	△	×	△
ウ段	×	△	◎	×	×	○	×	×	×
エ段	×	△	◎	×	×	×	×	×	×
オ段	△	△	○	○	△	△	△	×	×

表3 総合分析と頭音の行別分析との出現頻度比較

総合	0C2	無声音	有声音	/m/	/n/	/r/	/j/	/w/	/N/
ア行	○	×	◎	○	◎	△	×	△	○
カ行	×	△	○	○	○	△	△	△	○
サ行	○	◎	◎	△	○	○	×	×	×
タ行	△	◎	◎	×	△	○	◎	×	△
ナ行	○	×	◎	×	×	○	×	△	△
ハ行	×	○	◎	×	×	◎	△	×	◎
マ行	△	○	◎	△	△	○	×	△	×
ヤ行	△	○	◎	○	×	×	×	×	×
ラ行	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ワ行	×	△	◎	×	×	△	×	×	×

上記の表を観察すると、

①C2 が有声音の場合、その出現傾向はいずれの段に於いても総合分析結果と同様である。つまり、第 1 モーラがどのような音であろうと、C2 が有声音である場合の連濁化への影響はないと思われる。

②C2 が無声音の場合、イ段ではその出現傾向は総合分析とは異なる。第 1 モーラが C2 の連濁化への関与に影響がある可能性がある。

頭音の行毎の分析では、変化する V1 条件により、「3 モーラ目が連濁するかしないかに影響を及ぼしている」と思われる C2 に対して、

どのような作用を及ぼしているかを検討してみる。

①C2 が有声音の場合、その出現傾向はいずれの行に於いても総合分析結果と同様である。すなわち、第 1 モーラがどのような音であろうと、C2 が有声音である場合の連濁化への影響はないと思われる。

②C2 が無声音の場合、サ行とタ行の出現傾向は総合分析と同様である。この 2 つの行に関しては C1 の C2 の連濁化への関与に影響がある可能性がある。

③C2 が鼻子音/m//n/及び撥音/N/の場合、ア行、カ行の出現傾向は総合分析と同様である。これは第2モーラの音が直接連濁化に関与している可能性が高く、且つ併用項目が多い。

(/kamata//kamada/の場合/m/が連濁化に関与)

④C2 が流音/r/の場合、ハ行の出現傾向が総合分析と同様である。第2モーラの音が直接連濁化に関与している可能性が高い。(/hirata//harada/の場合/r/が連濁化に関与)

5. 結論

1) 連濁現象は、音韻環境のみの考察からも一定の要因を見いだすことができる。例えば、3モーラ目が濁音化するのは、C2 が無声の場合が多く、C2 が有声の場合連濁しないことが殆どである。(ライマンの法則に合致)

2) 3モーラ目が/ta/にも/da/にもなるのは、0C2、鼻子音/m//n/、撥音/N/の場合である。特に鼻子音の場合、先行研究では、主に/da/となるとしているが、むしろ/ta/にも/da/にもなりうることが判明した。

6. おわりに

今稿では C2 に焦点を当てた分析から C1V1 が C2 に与える影響について調査した。音の性質、機能などを考慮に入れ、結びつき易い子音と母音の関係調査等が今後に残された課題となるであろう。

参考サイト

www.alles.or.jp/~tsuyama/name.htm (閲覧日 : 2011.3.28)

参考文献

- [1] 平田淳子(2010), 連濁試論, 神戸海星女子学院大学紀要 49 号
- [2] 金田一春彦(1976), 連濁の解, SophiaLinguistica Vol.2
- [3] 今石元久編(2005), 音声研究入門, 和泉書院

[4] 窪園晴夫(2001), 日本語の音声, 現代言語学入門 2, 岩波書店

[5] 田中伸一(2009), 日常言語に潜む音法則の世界, 開拓社, 言語・文化選書 10

[6] ピーター・ラディifikidd著, 竹林滋 牧野武彦共訳(1999), 音声学概説, 大修館書店

